漱石の作品における食・もてなし
―『虞美人草』を例として―

范　淑文

（一）始めに

礼儀や体裁を重んじる日本社会では、貴族は言うまでも無く、庶民まで、日常生活のさまざまな面においてそれぞれの身分や場面に相応しい礼儀作法を以って振舞うという生活態度が、古くから固く守られ受け継がれてきた慣わしであることは言うまでもない。その中の一つ、主人の客への対応、つまり、もてなしに関しては、『日本風俗備考』と言う書物に、

> 天候挨拶が、最初の話題となる。つづいて、煙管や煙草またお茶が供され、最後に菓子とパイ、その他の美味しい食物が出される。[1]

と言う記述がある。勿論、その客の重要性や関係の深さによって、主人の接待の内容も異なってはくるが、兎に角先ず来客の際、煙管や煙草またはお茶でもてなすのは基本だったようである。さらに主客の関係が深まるにつれ、または主人の経済状況や生活パターンによっては、お菓子や食事まで用意する場合も少なくなかったのではと、当時の客へのもてなし方を想像することが出来る。

明治後半から大正前半にかけて日本の文壇で大活躍していた夏目漱石を例に見ても、作家としてデビューする前からすでに正岡子規を始め、色々な文学界や教育界の人々と往来するなど、うちは客で賑わっていたのも日常茶飯事であったことはよく知られている。そして、作品に目を向けても『吾輩は猫である』や『草枕』、などの早期作品、または『道草』など後期作品においても、客が来訪する場面は少なくない。「美味しい食物が出される」程度まで至らなくても、お茶やお菓子を出す程度のもてなしが普通の礼儀のように描かれている。そんな中『虞美人草』も前述の作品同様、来客の場面が沢山織り込まれている作品のように思われるが、そのもてなし方や雰囲気が話に出てくる家々によって異なるところが気にならずにはいられない。

本稿では、まず漱石の書簡を通して、漱石と来客の応酬の仕方を明らかにし、自伝小説と思われる『道草』を始め、『吾輩は猫である』や『草枕』などの初期作品におけるもてなしの場面を比較対象とし、その普遍性を提示したうえで、気になる作品『虞美人草』における宗近家の客へのもてなし及び、上流社会である甲野家に小野さんや糸子などの登場人物が訪れる場面に焦点を絞り、甲野家における客への接待の仕方やキャラクターの象徴としての理解のアプローチを試みてみる。

（二）漱石の生活振り

漱石の食生活について、嵐山光三郎氏が次のように語っている。

> 若從歸國後的漱石日記挑出食物項目。其中大多是西餐，找不到一般日本人首先想吃的日式飲食或者蕎麥麵，而且特別偏愛油膩的西餐，即使是日本餐點也是鰻魚飯、開化牛肉丼、壽喜燒等口味濃厚的料理，其餘特別明顯的是甜食類，尤其是餅乾。（下線引用者　以下同）[2]

嵐山氏は漱石のイギリス留学帰りの日記を調べ、以上のように漱石の食生活の傾向を述べている。イギリス留学やヨーロッパ文化の影響を受けたせいであろうか、漱石はお蕎麦などさっぱりした料理より、鰻御飯やすき焼きのようなこってりした味の料理を好み、それ以外に特にクッキーなど菓子類の甘い物をよく食べていたと纏められている。では、実際にイギリス留学中の漱石の食事振りを匂わせるものを当時の日記からピックアップしてみると、

＊此日Baker Streetニテ中食ス肉一皿（ママ）芋菜茶一椀ト菓子二ツナリ一（シリング）十片ヲ払フ晩入浴ス（明治34.3／5／火）
＊宿へ帰ツテ例ノ如ク茶ヲ飲ム今日ハ吾輩一人ダ誰モ居ナイソコデパンヲ余慶食ツタ是ハ少々下品ダツタ（明治34.4／5金）
＊茶ノ時御客二人来ル　御婆さんの甥ナリ　坊さんなり夫婦（明治34.7／26／金）[3]

などの記録が挙げられる。これらの記載によると、嵐山氏が纏めたように、漱石は御菓子を好むほか、ロンドンにいた頃にも、お茶を飲むことが生活習慣の中の一部であったことが伺えるだろう。

日記の外には、友人と応酬した書簡も当時の漱石の食生活や生活習慣などの理解に大いに役立つものがあ

る。『虞美人草』執筆までの書簡から食事や友人を奢ったりする内容のものを幾つか並べておこう。

＊伝四が来て雑煮を食はせろといふから一所に晩餐を食つた。君も雑煮を食ひに来給へ可成晩食の時が落付いてよい。(明治38.１.１野間真綱宛)
＊君年始をやめて雑煮を食ひにこぬか可成晩食の際が落付いてよい。(明治38.１.１寺田寅彦宛)
＊君がくれた猪肉で伝四を御馳走し。昨夜は又虚子四方太橋口兄弟を御馳走した昨夜は大分面白かつた是も君の御蔭と敢て一書を奉呈して感謝の意を表する。(明治38.１.04野間真綱宛)
＊昨夜は虚子と四方太と橋口兄弟を呼んで猪の雑煮を食はした。君はもう二返食つて居るから呼ばなかつた。(明治38.１.04野村伝四宛)
＊昨日は野間と野村が朝から来て昼御飯を食つて居たら寅彦が来て四人で神田へ行つて宝亭で晩食をしました。寅彦が奢つた。(明治38.９.11中川芳太郎宛)
＊昨日中川君と伝四君に御馳走をしました。(明治38.９.17高浜虚子宛)
＊昨夜は中川や何か四人ばかり来て夕飯をくつて快談をして暮らしました。(明治39.２.11中川芳太郎宛)
＊此東洋城といふのは昔し僕が松山で教へた生徒で…(中略) 又松茸飯を食はせてやつた。(明治39.10.21森田草平宛)
＊ひる頃に来てめしを食ひ玉へ。但し御馳走はなし。一所にくふといふ丈です。(明治38.12.18坂元雪鳥宛)
＊一昨夜橋口の宅へ招かれて雁を食つた雁は生まれて始めて食つて見た頗る甘ひ。(明治37.12.21野間真綱宛)[4]

以上の書簡から、漱石は野村伝四、中川芳太郎、森田草平、坂元雪鳥などの弟子を含め様々な関係の人をしばしば家に招待したり、ご馳走を振舞ったりしていたことが分る。そして、奢る際は人から貰った珍味を惜しまずに食材に使っては客に振舞ったりすることも珍しくなかった。とはいえ、「猪の雑煮」や「松茸飯」などのような御馳走もあれば、又簡素な物、有り合せの物を出して食べさせたりする場合もあり、いつも御馳走を振舞っていたとは限らない。また、一方的に奢るだけではなく、御馳走にもなるのも窺える。このように漱石の家への来客が頻繁になったことも書簡の中によく書かれている。

＊君が遠慮して来なくとも毎日来客で繁昌だよビスケットは事件頗る進行して最早一個もない(明治37.６.22野村伝四宛)
＊然し来客の三分の二は小生にインテレストをもつて居る人々だから小生の方でも逢ふとつい話が長くなる次第必竟自分で来客を製造して自分で苦しんで居るにすぎぬ愚見に候。(明治38.９.23野間真綱宛)
＊所で僕(ママ)も家も中々来客が多くて而も僕は客が嫌でないから思ふ様にもかけないので困る。(明治39.７.27浜武元次宛)
＊小生是から毎木曜日三時よりを面会日と相定め候につき時々遊びに御出でください。(明治39.10.７野間真綱宛)
＊余り来客が多いので木曜日の午後三時からを面会日定め申候すると木曜には色々な人がやつて来て愉快に候クラブの観有之候。(明治39.10.23坂元雷鳥宛)
＊近来来客で食傷の気味なり。(明治39.９.18畔柳芥舟宛)
＊小生来客に食傷して木曜の午后三時からを面会日と定め候。(明治39.10.８高浜虚子宛)[5]

『吾輩は猫である』などの作品で一気に人気を博したこともあろうが、漱石のうちには急に来客が頻繁になったようである。そうした来客に対して、漱石は弟子たちや友人との談話から小説のネタを得たり、互に作品や創作態度について意見を交換したりして、それを楽しむ場合もあれば、その影響で仕事が滞ったりして来客に対して煩わしく感じた場合も少なくなかったようである。それに、来客の回数が重なるにつれ「来客で食傷の気味あり」と言っては、来客にそれ以上耐えられない心境を吐いたりしていたことも窺える。これも面会日を毎週木曜日の一日に限定した理由の一つと考えられるであろう。一方、弟子や友人からは、お礼などの気持ちとして様々なものがしばしば送られている。

＊君のくれた菓子は僕が大概くつて仕舞つた。(明治38.４.13森巻吉宛)
＊君に桜の実をもらひ其後ある人よりビスケットを貰ひ二三日前乙なる西洋料理を御馳走になり(明治37.６.27畔柳芥舟宛)
＊頂戴仕つた柿を其後食つて見た処非常に旨いですよ。毎日食後に一つ宛たべます。(明治38.11.２鈴木三重吉宛)
＊松茸頂戴難有御礼申上候。(明治38.11.29森巻吉宛)
＊野間が雉子を届けてくれました。(明治39.１.16皆川正禧宛)[6]

柿や桜の実などのような平凡な果物、御菓子の外に、雉子のような珍味をはじめ、松茸のような高級なお土産までも貰っている。森巻吉宛の書簡に書かれた「君のくれた菓子は僕が大概くつて仕舞つた」や「ある人よりビスケットを貰ひ」などのような文面から、前で引用した嵐山氏が指摘した漱石が御菓子など甘いものを好んでいたということが一層明らかになってきた。

（三）作品に見るもてなし

自身の実生活の外に、漱石の文学作品の中にも客をもてなす場面が沢山盛り込まれている。先ず割りと実生活に沿って描かれた自伝風小説である『道草』を例に挙げよう。

> 彼は其所にある塩煎餅を取つて矢鱈にぼりへ噛んだ。さうしてその相間へには大きな湯呑へ茶を何杯も注ぎ易へて飲んだ。
>
> 「相変わらず能く食べますね。今でも鰻飯を二つ位遣るんでせう」
>
> 「いや人間も五十になるともう駄目ですね。もとは健ちやんの見てゐる前で天ぷら蕎麦を五杯位ぺろりと片付けたもんでしたがね」（二十八章）[7]

『道草』第二十八章、養父島田とそれ以上の関わりを防ぐために健三も兄も姉の所で落ち合い、喘息で寝込んでいる姉に代わり、義兄の比田が応対に出て来る場面である。義兄の不真面目さや浮気で姉のうちは主人公健三の助けを受けながら、何とか細々と生計を立てている。こうした姉のうちでも、健三たちが訪れる度に、お茶のほかにお煎餅も出されている。このように決して裕福な生活をしていない姉は元気な時、健三が家に見えたら、弟の健三に何かを食べさせる場面は次のように描かれている。

> 「久し振りに何か奢りませうか」と姉の顔を眺めながら云つた。
>
> 「ありがと、今御鮨をさういつたから、珍しくもあるまいけれども、食べてつて御呉れ」
>
> 姉は客の顔さへ見れば、時間に関係なく、何か食はせなければ承知しない女であつた。（五章）[8]

お金がないにもかかわらず、奢りたがるのである。無論、上等なものなど出せないのも無理はないことである。とはいえ、健三は美味しくない寿司を食べないわけには行かない。「時間に関係なく」、客を奢りたい、その誠意を表そうとする姉の気持ちに答えようとする客としてのエチケットであるからであろう。そうした姉は食事だけではなく、自分の持っている物を人にあげる癖もあると描かれている[9]。

健三の姉のもてなしのほか、健三の養父である島田の娘お縫いが健三を招待する場面も織り込まれている。

> 健三は一度その新宅の門を潜つた記憶を有つてゐた。其時柴野は隊から帰つて来た身体を大きくして、長火鉢の猫板の上にある洋盃から冷酒をぐいへ飲んだ。御縫さんは白い肌をあらはに、鏡台の前で鬢を撫でつけてゐた。彼はまた自分の分として取り配けられた握り鮨をしきりに皿の中から撮んで食べた[10]。（二十二章）

島田の娘であるお縫いの新婚当時、その新居を訪ねた光景を健三が思い出した描写である。新居訪問という理由からでもあろうか、握り寿司のほかに、少し洒落た器「洋盃」に注がれた「冷酒」も出されている。やや豪華なもてなしである。食べ物だけではなく、「洋盃」という器によって健三の姉と世代が違うもてなしの現われとも捉えられるだろう。若い世代の生活の中に西洋化のシンボルとして西洋のコップが使われていると理解できる半面、主が自分の西洋化を自慢したいという心理も窺えるだろう。

自伝小説ではなく、フィクション小説の『吾輩は猫である』（以下は『猫』と略称する）になると、そのもてなしの場面はどのように取り扱われているのであろうか。

> （1）寒月さんがお出でになりましたといふ。此寒月といふ男は矢張り主人の旧門下生であつたさうだ、（中略）寒月君は面白さうに口取の蒲鉾を箸で挟んで半分前歯で食ひ切つた。吾輩は又欠けはせぬかと心配したが今度は大丈夫であつた。（二章）
>
> （2）「御別れしたものゝ実は午飯の時刻が伸びたので大変空腹になつて弱りましたよ」「夫は御迷惑でしたらう」と主人は始めて同情を表する。（中略）東風君は冷たくなつた茶をぐつと飲み干して（中略）「一寸失敬」と主人は書斎へ印をとりに這入る。吾輩はぽたりと畳の上へ落ちる。東風子は菓子皿の中のカステラをつまんで一口に頬張る。（二章）
>
> （3）主人はまたやられたと思ひ乍ら何も云はずに

空也餅を頬張つて口をもごへ云はして居る。(中略)「皆去年の暮は暗合で妙ですな」と寒月が笑ふ。欠けた前歯のふちに空也餅が着いて居る。(二章)

（4）「どうも御退屈様、もう帰りませう」と茶を注ぎ易へて迷亭の前へ出す。(中略)「君まだ居るか」と主人はいつの間にやら帰つて来て迷亭の傍へ坐はる。「まだ居るのかは些と酷だな、すぐ帰るから待つて居給へと言つたぢやないか」(三章)[11]

引用文（1）－（4）のいずれの場面も東風君、寒月、そして迷亭などの来客に対して、最低限度のお茶が出されている描写である。それ以外に、（1）は第二章で、訪れてきた寒月君に蒲鉾など御正月のおせち料理をもてなしている。また（2）の引用文も同じく第二章の一節で、来客の東風君が、お茶のほかに「菓子皿の中のカステラをつまんで一口に頬張る」というもてなしの描写が見られる。これらから、主人公先生のうちは漱石のうちを彷彿させ、節句に合わせたおせちのほか、カステラのような洋菓子も時には出されていることが伺える。続く引用文（3）においても、「主人はまたやられたと思ひ乍ら何も云はずに空也餅を頬張つて口をもごへ云はして居る。」「寒月が笑ふ。欠けた前歯のふちに空也餅が着いて居る。」と、来客の寒月に空也餅を奢っている事がわかる[12]。この場面の空也餅は主人である先生が自分で買ったのか、それとも貰ったのかは、はっきりしないが、カステラなどを合わせてみれば、この主人のうちは御菓子などにある程度拘っていると考えていいだろう。

さて、美を求めるために、俗世界を離れ、桃源郷と思わせるような奥山へ旅に出掛け、その旅先で様々な美の対象と出会ったことが描かれた作品『草枕』に至ると客に対するもてなしは如何なるレベルのものになるのであろうか。

（1）菓子皿のなかを見ると、立派な羊羹が並んでゐる。余は凡ての菓子のうちで尤も羊羹が好だ。別段食ひたくはないが、あの肌合が滑らかに、緻密に、しかも半透明に光線を受ける具合は、どうみても一個の美術品だ。(四章)

（2）御茶の御馳走になる。

老人はいつの間にやら、青玉の菓子皿を出した。大きな塊を、かく迄薄く、かく迄規則正しく、刳りぬいた匠人の手際は驚ろくべきものと思ふ。(八章)[13]

引用文（1）は『草枕』の第四章、画工が泊まっている旅館の経営者と同然の若女将である那美が招待かサービスのつもりでお茶と御茶菓子を、泊り客である画工の部屋に運んできてご挨拶をしている場面であり、引用文（2）は第八章、画工が大徹和尚様と共に、那美の父親の招待を受ける場面である。前者は主人に出された羊羹のその透明感や緻密で滑らかな肌具合などに画工が惹かれ、そこから羊羹の芸術性を見い出した。一方後者はどんな御菓子が出されているか触れてはいないが、ご隠居様に招待された席上では、画工はすっかり菓子皿の方に眼を奪われ、美しい「青玉の菓子皿」の巧妙さ、その芸術品を作る職人の手の動きや心がどのように打ち込められたのかなど菓子皿を鑑賞しながらその芸術品の深みを想像している境地にまで達しているのである。二つの場面とも招待を受けた画工は食という味覚の段階を超えその芸術性に見入っている。

こうしてみると『猫』の中におけるもてなしは食生活から抜けられず、その実用性が強調されているが、それに対して『草枕』におけるもてなしは食生活の匂いが薄らいでいき、美的感覚まで昇華されていると捉えられるだろう。

（四）『虞美人草』におけるもてなし方やその場面の雰囲気

さて、朝日新聞入社後の第一弾の連載小説である『虞美人草』の中にももてなしの場面が沢山盛り込まれている。そのもてなし方や雰囲気が果たして凡て共通しているだろうか、疑わしいものである。まず、『虞美人草』に登場する人物は甲野家、宗近家及び孤堂家、そしてまだ世帯を持っていない小野家との四つの家庭の人たちから構成されている。小野さんはこれから世帯を持つように頑張っている独身者であり、人を招待するより、人のうちへ足を運ぶ方が多いため、今回は小野さんのうちにおけるもてなしを除く他の三つの家庭における客への接し方などに焦点を絞って考察していく。

まず、孤堂先生のうちに客が訪れる場面を見てみよう。

「茶碗が出てゐるね。誰が来たのかい」

「えゝ。小野さんが入らしつて……」

「小野が？そりやあ」と云ったが、提げて来た大きな包をからげた細縄の十文字を、丁寧に一文字宛ほどき始める。(九章)[14]

引っ越したばかりの孤堂先生親子の家に小野さんが訪れてくるが、あいにく孤堂先生が留守で、娘の小夜子が一人で応対していた。小野さんが帰り、孤堂先生が帰宅してきた親子二人の会話の場面である。引っ越して来たばかりという不便さにもかかわらず、最低限のお茶のもてなしがなされていたのである。

続いて、宗近家におけるもてなしの様子を見てみよう。

（1）同時に豊かな灯が宗近家の座敷に点る。静かなる夜を陽に返す洋灯の笠に白き光をゆかしく罩めて、唐草を一面に高く敲き出した白銅の油壺が晴がましくも宵に曇らぬ色を誇る。灯火の照らす限りは顔毎に賑やかである。

「アハヽヽヽ」と云ふ声が先づ起る。此灯火の周囲に起る凡ての談話はアハヽヽヽを以て始まるを恰好と思ふ。（中略）甲野さんは茶碗を前に、くすんだ万筋の前を合して、黒い羽織の襟を正しく坐つてゐる。（中略）今夕の会話はアハヽヽヽに始まつてアハヽヽヽに終つた。（八章）

（2）あまり丁寧に御辞儀をする女は迷惑だ。第三の人が云ふ。人間の誠は下げる頭の時間と正比例するものだ。色々な説がある。（中略）

「アハヽヽ…今時のものは呑気なものでアハヽヽヽ。――どうです粗菓だが一つ御撮みなさい。岐阜の柿羊羹」

「いえどうぞ、もう御構ひ下さいますな……」

「あんまり、旨いものぢやない。只珍しい丈」だと宗近老人は箸を上げて皿の中から剥ぎ取つた羊羹の一片を手に受けて、独りでむしやへ食ふ。（十章）[15]

引用文（1）は京都旅行から帰って来た甲野が親友宗近のうちへ遊びに来ている場面である。本人同士だけではなく、宗近の親爺も妹もその会話の仲間に加わり、四人で賑やかに甲野と宗近との京都旅の土産話に花を咲かせているのである。引用文（2）は宗近が藤尾を結婚の相手として望んでいるかどうかを確かめ、出来ればその父親による結婚の約束を断りたいという気持ちを藤尾の母が抱いて宗近のうちを訪ねている場面である。勿論、どちらの場面も最低限のお茶が出されている。それ以外に藤尾の母親が登場している方は「岐阜の柿羊羹」という珍しい和菓子を宗近の親爺に勧められている。一方、甲野が客になっている引用文（1）のもてなしについては、後の博覧会の喫茶店での若者たちの話より、甲野があの日宗近家で夕食をご馳走になったことが分る。いずれも恥ずかしくないもてなしであろう。それより、「静かなる夜を陽に返す洋灯の笠に白き光をゆかしく罩めて」、「灯火の照らす限りは顔毎に賑やかである。」という、四人が集まっている座敷についての描写に注目したい。夜とはいえ、宗近家では暗闇が少しも感じられず、昼間とも感じられるように明るく灯りをつけ、客を温かく迎えるように気を配っているというより寧ろ、家族全員がそうした雰囲気のキャラクターと言った方が適切かもしれない。それは、「今夕の会話はアハヽヽヽに始まつてアハヽヽヽに終つた。」と言う語り手のコメントが付けられている点からも想像がつくのである。親爺だけでなく、息子である宗近一も親譲りの性格で、妹の糸子とも甲野や、小野さんなどの登場人物と話す際には、陽気な顔を見せ、常に明るい空気を回りに吹き込んでいる。

一方、甲野家の方ではどんなもてなしがなされているのであろうか。関係者全員が甲野家に集まる藤尾と小野さんとの恋の破局のシーンを除いては、小野さん一人でよく出入りする外は、糸子が一度だけ訪問している。しかし、不思議な事に、下女がいないわけでもなく[16]、かつては父親が良く外国に滞在していたし、家には洋風間もある、といった上流社会風の甲野家は、小野さんが見えた時にも、糸子が尋ねている時にも、お菓子どころか、最低限招待のお茶を出す描写すら見えないのである。しかも、何よりも異常なのは主人役である藤尾の接待の態度である。先ずは第二章、「謎の女」である藤尾の母親が留守している間、小野さんが甲野家を訪問している、藤尾と二人っきりの場面である。やや長いが、下記に引用しておこう。

「まだ、そこに入らしつたんですか」と女は落ち付いた調子で云ふ。これは意外な手答である。（中略）女は始めより、わが前に坐はれる人の存在を、膝に開ける一冊のうちに見失つてゐたと見える。（中略）六畳の座敷は緑濃き植込みに隔てられて、往来に鳴る車の響きさへ幽かである、寂寞たる浮世のうちに、只二人のみ、生きてゐる。茶縁の畳を境に、二尺を隔てゝ互に顔を見合した時、社会は彼等の傍を遠く立ち退いた。（中略）動かせばそれ限りである。呼ぶは只事ではない、呼ばれるのも只事ではない。生死以上の難関を互の間に控へて、轟然たる爆発物が抛げ出されるか、抛げ出すか、動かざる二人の身体は二塊の焔である。

「お帰りいっ」と云ふ声が玄関に響くと、(中略)張り詰めた二人の姿勢は崩れた。
(中略) クレオパトラは果然、
「まあ、御坐り遊ばせ」と叮嚀な命令を下した。
男は無言の儘再び膝を崩す。御互に春の日は永い。(中略)
「藤尾」と御母さんは呼び直す。
女の眼は漸くに頁を離れた。(中略)
「なに？」と藤尾は答へた。昼と夜の間に立つ人の、昼と夜の間の返事である。
「おや気楽な人だ事。そんなに面白い御本なのかい。――あとで御覧なさいな。失礼ぢやないか。――此通り世間見ずの我儘もので、まことに困り切ります。」(二章)[17]

この段階では、小野さんは表向きでは藤尾の英語や文学の家庭教師として甲野家にしばしば出入りしている存在だと語られている。が、「往来に鳴る車の響きさへ幽かである、寂寞たる浮世のうちに、只二人のみ、生きてゐる。」「動かざる二人の身体は二塊の焔である。」という描写から、下女は台所かどこかに控えており、応接間には小野さんと藤尾との二人っきりになっている情況がうかがえる。この一節から、二人は師弟関係というより、区切られた空間に、相手以外の世界が眼に入らず、外の音も聞えない、互に相手しか意識していない一人の男と一人の女と見なす外はない。ほんの僅かな間であるが、もう少しで一歩進みそうな男女関係のムードの中で、二人が共有の時間を享受していた。もう一歩で気持ちが言葉に変換され、行動で確かめられるところへ、お母さんが帰ってきた。

更に「動かざる二人の身体は二塊の焔である。「お帰りいっ」と云ふ声が玄関に響くと、(中略) 張り詰めた二人の姿勢は崩れた。」という描写から、師弟関係である一方、小野さんと藤尾は互に結婚の相手と考えるほど好感を持ち合っている曖昧な関係でもあったのは明らかであろう。にもかかわらず、しばらく本を読み耽っていた藤尾は、ずっとそこにいた小野さんにまるで始めて気付いたようで、「まだ、そこに入らしつたんですか」と女は落ち付いた調子で云」ったり、また「女は始めより、わが前に坐はれる人の存在を、膝に開ける一冊のうちに見失つてゐたと見える。」と語り手が藤尾のそうした応対に苛烈な批判をつけている。小野さんを結婚の相手と意識しながら、そのもてなし方は主客の応対どころか、客である小野さんを見下している姿勢を構えているのは改めて言うまでもないだろう。そうした態度の延長で、そろそろお暇をする小野さんに「「まあ、御坐り遊ばせ」と叮嚀な命令を下した」。こうした客への接し方は、宗近家、あるいは孤堂先生のうちでも、非常識と思われるに違いない。しかし、わがヒロインである藤尾にとっては、人の存在を無視したり、人を見下している態度は日常茶飯事のようである。その続きであるが、母親に何回も呼ばれた後、「女の眼は漸くに頁を離れ」て「なに？」と藤尾は答へた。完全に人の話や存在を無視している態度である。そうした礼儀知らずわが娘を、「おや気楽な人だ事。そんなに面白い御本なのかい。――あとで御覧なさいな。失礼ぢやないか。――此通り世間見ずの我儘もので、まことに困り切ります。」と母親が厳しく警めるどころか、「我儘」「困りきります」と、軽い気持ちで客に向かって弁解っぽい説明を加えている。娘のみでなく、母親ももてなす側としては不合格であろう。

小野さんのほかに、糸子が訪れる場面においても藤尾がそうした無礼なもてなし方を変えない。

藤尾と糸子は六畳の座敷で五指と針の先との戦争をしている。凡ての会話は戦争である。
女の会話は尤も戦争である。(中略)
「まだ何処へも行かないの」
宅にばかり居て、よくこう満足していられると藤尾が思ふ。――糸子の眼尻には答へる度に笑の影が翳す。(中略) 所へ小野さんが来る。小野さんは過去に追ひ懸けられて、下宿の部屋のなかをぐるへと廻つた。(中略)小野さんは未来の袖に隠れやうとする。
小野さんは蹌々踉々として来た。只蹌々踉々の意味を説明し難いのが残念である。
「どうか、なすつたの」と藤尾が聞いた。(中略)
「大変御顔の色が悪い事ね」と糸子が云つた。(中略) 小野さんは何時になく黙つてゐる。眼さへ、藤尾の方へは向けないで、床の山吹を無意味に眺めてゐる」(六章)[18]

第六章、甲野家を訪れている糸子と藤尾との会話の場面である。「藤尾と糸子は六畳の座敷で五指と針の先との戦争をしている。凡ての会話は戦争である。女の会話は尤も戦争である。」とはっきりその場の空気を語っている。もてなすどころか、主人である藤尾が客の糸子をいろいろな方面でのライバルと見なして言葉による戦いをしたり、「宅にばかり居て、よくこう満足していられると藤尾が思ふ」とのように、糸子を貶している。

「五指」とは人に何かを示す時、五本の指を揃って方向を示すというしぐさの事で、その「糸子の答は大概半分で切れて仕舞ふ」という表現を合せて見れば、糸子は物事を表現する時、ストレートな態度を取らず、より婉曲的で控え目な行動を取るイメージ、つまり相手に好印象を与えるような古風な女性だと語り手が仄めかしていると思える。それに対して、藤尾の方は、「針の先」というタイプの人だと喩えられている。言い換えれば、相手にどこかの方向を促す時、確かにその方向を迷うことなくはっきり指し示す事が出来るが、相手にとっては交わされる言葉が針の先のようなもので、刺々しく、常に刺されることを覚悟せねばならぬという暗示でもあるのは明らかである。案の定に、藤尾を相手とするこの戦争の中では、勝負がとっくについているのは言うまでもないことであろう。そうした情況に身を置かれている糸子は気がつかずに、藤尾との対応には「眼尻には答へる度に笑の影が翳す」ほど、純真でおおらかな人柄をそのまま振舞っているのである。

そこへ、「小野さんは蹌々踉々として来た。」という設定になっている。過去の象徴である孤堂親子が自分に近付いてくるのに堪らなく、未来の象徴である藤尾のところにやってきたのである。そんな狼狽した小野さんを見た藤尾は、

「どうか、なすつたの」と聞いただけで、落ち着かせるためのお茶などの描写は一切されていない。藤尾に続き、糸子も「大変御顔の色が悪い事ね」と小野さんの尋常じゃない状態に気付いた。こうした「蹌々踉々とし」た小野さんを前にしても、主人である藤尾がお茶とかお水を出す描写が見当たらないのは、決して偶然とは思えず、作者の意図的な計らいで、何かの寓意が潜んでいるに違いないだろう。

次の若者たちが集まって博覧会を見物したのち、一角の喫茶店で一休みをしている場面に目を向けよう。

> 「はあゝ、さうか。亡国の菓子ぢやなかつたかね。兎に角阿爺は西洋菓子が嫌だよ。柿羊羹か味噌松風、妙なもの許珍重したがる。藤尾さんの様なハイカラの傍へ持つて行くとすぐ軽蔑されて仕舞ふ」(中略)
>
> 「…糸公も一つ御上り。どうだい藤尾さん一つ。——然しなんだね。阿爺の様な人はこれから日本に段々少なくなるね。惜しいもんだ」とチョコレートを塗つた卵糖を口一杯に頬張る。
>
> 「ホヽヽヽ一人で饒舌て……」と藤尾の方を見る。藤尾は応じない。
>
> 「藤尾は何も食はないのか」と甲野さんは茶碗を口へつけながら聞く。
>
> 「沢山」と云つたぎりである。
>
> 甲野さんは静かに茶碗を卸して、首を心持藤尾の方へ向け直した。(十一章)[19]

「…糸公も一つ御上り。どうだい藤尾さん一つ。」とチョコレートを塗つた卵糖を口一杯に頬張る宗近が、藤尾に軽蔑されそうな和菓子じゃなく、寧ろハイクラスと思われる洋菓子を、糸子にも藤尾にも薦めている。また傍から、「藤尾は何も食はないのか」と紅茶を飲んでいる甲野さんも藤尾に声を掛けたことにもかかわらず、「沢山」と短い言葉以外に藤尾はなにも応じないのである。勿論、自分ばかりに気を囚われていると思っていた小野さんが他の女性とお茶を飲んでいることで気が揉んでいて堪らないため、食欲がないのは理解できないこともない。しかし、せっかく皆が楽しくお茶や御菓子を楽しんでいるのに藤尾が一人だけ塞いでお茶にも御菓子にも手を出さない。つまり、藤尾が人とお茶や御菓子を楽しむシーンは一つもないのである。こうした現象は他人との時に限らず、藤尾が母親と一緒の時でも同様である。親子がお茶を飲んだり、お菓子を食べたりする長閑な風景は一個も見当たらないのである。

> 長烟管に烟草の殻を丁とはたく音がする。(中略) 薩摩の急須の中には、緑りを細く綯り込んだ宇治の葉が、午の湯に腐やけた儘、ひたへに重なり合ふて冷えてゐる。
>
> 「御茶でも入れ様かね」
>
> 「いゝえ」と藤尾は疾く抜け出した香りの猶余りあるを、急須と同じ色の茶碗のなかに畳み込む。黄な流れの底を敲く程は、左程とも思へぬが、縁に近く漸く色を増して、濃き水は泡を面に片寄せて動かずなる。(中略) この作者は趣なき会話を嫌ふ。猜疑不和の暗き世界に、一点の精彩を着せざる毒舌は、美しき筆に、心地よき春を紙に流す詩人の風流ではない。(中略) 宇治の茶と、薩摩の急須と、佐倉の切り炭を描くは瞬時の閑を偸んで、一弾指頭に脱離の安慰を読者に与ふるの方便である。(八章)[20]

宇治茶を飲むほどの上流社会でありながら、「薩摩の急須の中には、緑りを細く綯り込んだ宇治の葉が、午の湯に腐やけた儘、ひたへに重なり合ふて冷えてゐる。」とのように、飲んでいる場面の温かさの代り

に、その「冷えて」いる、淋しい様子が語られている。しかも、その後、「御茶でも入れ様かね」という母親の提案を否定して、藤尾は「疾く抜け出した香りの猶余りあるを、急須と同じ色の茶碗のなかに畳み込」んでしまうのである。せっかく親子二人でお茶を楽しむ優雅な一時のチャンスを逃してしまったのである。これは作者の意図的な企てと考えるしかない。「針の先」に喩えられる藤尾は常に刺々しい言葉を使い、人の存在を無視したり、人を見縊っているキャラクターとして作られているため、母親を含め、人と一緒にいる時は、身に着けている鎧で、心を閉ざし、寛ぐことも許されていないのではなかろうか。

（五）結び

『虞美人草』を勧善懲悪小説[21]として読む他に、文明批判小説[22]と看做す見方もある。

文明批判として読むなら、いうまでもなく、藤尾が文明の象徴の一つと思われる。上田正行氏が「『虞美人草』――「型」の美学」と題した一文の中で、

> この構図は「彼岸過迄」で、はっきりと〈恐れる男〉と〈恐れない女〉と言う表現で定着する。この構図を重視すれば、やはり、漱石の女性への潜在的恐怖心、脅迫観念が出ているというべきであろうか。このような一般論で漱石の男女の関係を捉えることは、必ずしも不当ではないが、「草枕」から「三四郎」までの男女関係はこの図式だけでは弱い。言うまでもなく、那美・藤尾・美禰子の造型には文明批評が絡まる。三人はそれぞれイプセン系の女として造型されているのが際立った特色をもっている。[23]

「那美・藤尾・美禰子の造型には文明批評が絡まる」と述べている。生活振りや生活の匂いなどを氏のいう「造型」の中身としてみるなら、那美と藤尾とはそのキャラクターが異なっており、実質には隔たりがあると思わずにはいられない。『草枕』の画工と那美、及び画工と那美の父親であるご隠居様と、御茶を飲む場面を引いておこう。

（１）菓子皿のなかを見ると、立派な羊羹が並んでゐる。余は凡ての菓子のうちで尤も羊羹が好だ。別段食ひたくはないが、あの肌合が滑らかに、緻密に、しかも半透明に光線を受ける具合は、どうみても一個の美術品だ。ことに青味を帯びた練上げた方は、玉と蠟石の雑種の様で、甚だ見て心持がいゝ。のみならず青磁の皿に盛られた青い練羊羹は、青磁のなかゝら今生れた様につやへして、思はず手を出して撫でゝ見たくなる。西洋の菓子で、これ程快感を与へるものは一つもない。クリームの色は一寸柔らかだが、少し重苦しい。(四章)

（２）御茶の御馳走になる。

老人はいつの間にやら、青玉の菓子皿を出した。大きな塊を、かく迄薄く、かく迄規則正しく、刳りぬいた匠人の手際は驚ろくべきものと思ふ。すかして見ると春の日影は一面に差し込んで、差し込んだ儘、逃がれ出づる路を失つた様な感じである。中には何も盛らぬがいゝ。(八章)[24]

引用文（１）（２）の通りに、「立派な羊羹」や御菓子を載せる菓子皿を芸術品とする鑑賞は画工の目によるものであるが、そうした菓子皿などの芸術品や生活のゆとりと思われる羊羹を生活の中の一部に取り込み、適切な場にそれを登場させ、優雅にそれを生かすことができるのは他でもなく、那美及び骨董趣味を持っている那美の父親である。離縁されて実家に戻った那美は封建的な村那古井では様々なプレッシャーを背負っているため、周りの人々の目には狂っているように映ってはいるが、彼女なりに長閑で優雅な一面を持っているほか、更に大徹和尚さんのもとで、東洋的な修業――禅を習っている。言葉を言い換えれば、那美は意外に東洋的な部分が身に付いていると言ったほうが適切かもしれない。一方、文明の象徴である藤尾は、上流社会に生きている人物として造型されていながら、風流どころか、お茶を嗜むなどのゆとりもない、常に「針の先」のように身を構えて他者に接するキャラクターで、自分以外の人が同じ場にいる際には、食事は勿論のこと、御菓子やお茶さえ共に賞味することが出来ない、淋しくて憐れな女性と思わずにはいられない。こうしてみれば、文明の点から論じる場合、那美と藤尾とはかなりの隔たりがある。その共通点を強いて言えば、その時代の憐れな女性という点で共通していると私は考えたいのである。

漱石が明治39年に書いた断片の中には、食事に関するユニークな発想がある。

> 人間ハ朝カラ晩迄仮面ヲ被ツテ居ル。只飯ヲ食フ時丈ハ仮面ヲトル。敢テトリタイカラデハナイ。トラネバ飯ガ食ヘンカラデアル。飯ヲ食フコトハ仮面ヨリモ大切デアル。

仮面ヲトランデモ飯ガ食ヘル者ハ始終ツケテ居ル。華族ダノ金持ハ是デアル。ダカラ華族ヤ金持ハ仮面ダカ本当ノ顔ダカワカラナイ顔ヲシテ居ル。[25]

ここでは、御飯としか書いていないが、恐らくお茶や御菓子など、すべての食の類に向かう時にも通じているのであろう。つまり、食する際には、動物は元々そうであろうが、われわれ人間さえも、普段様々な他者に向かう時に被る「仮面」を外さねばならなく、つまり真の顔を見せるのが自然だと漱石が考えていたのであろう。しかし、『虞美人草』の中の藤尾、またはその母親は、常に「仮面」を被っているため、うちに客が見えた時にも、人と一緒の時にもお茶や御菓子を楽しむ一時さえも、語り手に人と真顔で接することを許されなかったと捉えられるだろう。となると、『虞美人草』におけるお茶や御菓子などの食は、その場の雰囲気を象徴するもので、緊張した雰囲気を和らげる働きを持っていると限られ、そうしたゆとりを持っていない場面であれば、お茶も御菓子も省かれるか、禁じられることになるのである。

注

1　『日本風俗備考２』フィッセル著　庄司三男＆沼田次郎訳注　平凡社　1978.10.25　P.46（原書は「日本国の知識への寄与」と題し、江戸時代に出版されたものである。）
2　『文人的飲食生活』嵐山光三郎　孫玉珍&林佳蓉共譯　宜高文化2004　P4.5（原書の資料が手に入らなかったので、中国語の訳本の資料を敢えて引用させていただく）
3　『日記上　漱石全集　第十九巻』岩波書店
4　『書簡上　漱石全集　第二十二巻』岩波書店
5　『書簡上　漱石全集　第二十二巻』岩波書店
6　『書簡上　漱石全集　第二十二巻』岩波書店
7　『道草』（『漱石全集　第十巻』　岩波書店）
8　『道草』（『漱石全集　第十巻』岩波書店）
9「他に物を食はせる事の好きなのと同時に、物を遣る事の好きな彼女は、健三が此前賞めた古ぼけた達磨の掛物を彼に遣らうかと云ひ出した。」（六章）『道草』（『漱石全集　第十巻』　岩波書店）
10　『道草』（『漱石全集　第十巻』　岩波書店）
11　『吾輩は猫である』(『漱石全集第一巻』岩波書店)
12　この空也餅は当時、上野公園池の端にあった菓子舗「空也」で買い求めたようで、半搗きの餅でつぶし餡をつつんだ菓子のことである。明治三十七年十二月二十二日付橋口貢宛の書簡に「空也堂の菓子は頗る洒落たものですな」という一節がある。
13　『草枕』（『漱石全集　第三巻』岩波書店）
14　『虞美人草』（『漱石全集　第四巻』）岩波書店
15　『虞美人草』（『漱石全集　第四巻』）岩波書店
16　博覧会見物を経て久しぶりに小野さんが甲野家に姿を現した時に、「小野さんが入らつしやいましたと下女が両手をつかへる。母は自分の部屋へ引き取る。」という、甲野家の様子に関する描写がある。この描写から、甲野家には下女がつけてあることが明らかである。(『虞美人草』『漱石全集　第四巻』）岩波書店　P. 245)
17　『虞美人草』（『漱石全集　第四巻』）岩波書店
18　『虞美人草』（『漱石全集　第四巻』）岩波書店
19　『虞美人草』（『漱石全集　第四巻』）岩波書店
20　『虞美人草』（『漱石全集　第四巻』）岩波書店
21　勧善懲悪説の支持者としては正宗白鳥や唐木順三や桶谷秀昭などが挙げられる。
22　文明批判説の最も代表的な研究者は平岡敏夫であろう。平岡敏夫「『虞美人草』論」（『漱石作品論集成第三巻』所収1991.7.10 桜楓社）
23　上田正行　『虞美人草』――「型」の美学（『国文学解釈と鑑賞』㑊55巻９号　1990.5　至文堂P.76）
24　『草枕』（『漱石全集　第三巻』岩波書店）
25　『日記上　漱石全集　第十九巻』岩波書店　P.249

はん　しゅくぶん／国立台湾大学　日本語文学科　副教授